

〔共同研究〕

女性の話しことば — テレビのインタビュー番組から —

遠藤 織枝 小林 美恵子
卓 星 淑 丸山 和香子

— はじめに —

資料の扱いと目的について。

現代の日本の女性の話しことばの実態を知る試みとして、NHKテレビ番組「おはようジャーナル」の中の話題の女性に対するインタビューを題材に選んだ。それは、1987年1月～1989年6月までに放映されたものである。

その時どきの話題になった女性で、年齢も職業もさまざまであること、登場する女性たちの話し方は、特にかた苦しくもくだけすぎてもいない普通の話し方であること、同じインタビュアー古屋和雄氏（以下F氏とする）によるものなので、扱われ方が共通していること、15分ぐらいのインタビューで、話題の広がりがあること、などが、この材料を選んだ理由である。出場したゲストの一覧表は文末に掲げた。

資料は次のように扱った。

まず該当番組（金曜の朝8時35分～50分ぐらい）のVTRを文字化する。文字化は、音声の微妙な変化、言いよどみなどは顧慮せず、文としてわかるような記録にした。たとえば次のようである。

インタビュアー（以下「I」とする）

でも、実際その、アクシデントといいましょうか、けがなさったりしたんでしょう。／

ゲスト（以下「G」とする）

ええ／そうですね。／シン帯とかね、首がとかね、いろいろありましたけど。／

I 首？／

G 手も切ったり、足も切ったりとか、いろいろありましたけどね。／

I ええ。／

G でもあの、なんでもないんですよ。／

文の数を問題にする場合の、文の分け方としては『話しことばの文型Ⅰ』（国立国語研究所・19）の、文とは「陳述を負う述語または独立語一つをもち、社会習慣としてひとまとまりの意味をあらわして言い切ることば」「文は、話し手が自己の感情や判断叙述や命令、質問、応答などを表現するひとまとまりのことばである」の考え方と同書の分け方にならない、上記で／を入れたように切ることにした。音の切れ目があっても、内容に切れ目がなく続いている場合は文は切り分けない。したがって、次のような文は1文と考える。

（例1）G よくね、直接こうね、いろいろな方とお会いますと、あれっ意外とお若いんですねって言われて。（ケース3）

倒置文も述部で切らない。

（例2）G ふだんの生活でもすごい使いますね。これは。（ケース6）
完全に終止の形になっていなくても、次の表現と内容が異なる場合は切って2文とする。

（例3）G 大学時代、そういうサークルにいたんですけども。／ただ、ああいうふうに朗読するっていうのはほとんど初めてで…。

こうした資料を22人分集め、それに基づいて次のような観点から分析した。

- ① 女性ゲストの談話の中の敬語使用の実態はどのようなものか。
- ② 応答詞、終助詞はどのように用いられているか。
- ③ ゲストの用いる名詞から丁寧度がわかるか。
- ④ ゲストはどのような縮約表現を用いているか、それは丁寧度にどう反映しているか。

以上の項目に分けて、①卓星淑、②遠藤織枝、③小林美恵子、④丸山和香子がそれぞれ執筆し、遠藤が整理統一を行った。